「漱石と広島」の会 会報
第19号

消える「こころ」痛惜の辞

読み手の心情 映した「鏡」
あれほど生徒に響いたのに

下岸 大助

「これって本当に百年以上も前の小説なんですか」

「私は普段全く本を読まない。長い文章は嫌いだ。でも今回は飽きなかった」

「シンプルに面白い」

夏目漱石『こころ』を読んだ生徒の声である。私が勤める高校には、小説嫌いな生徒も多い。しかし『こころ』の授業は毎年受けがいい。今の高校生にも響く何かがあるのだと確信している。

進め方はシンプルである。一節ずつ読み進める。授業で扱った箇所の続きは絶対に読んではならない。ネタバレ禁止。最後に、続きがどうなるか予想させる。つまり大正三年の新聞連載を同時代の人が読んだのと同じ方法である。

当時も、連載の一回分を読み、さあ続きはどうなるのかなと考えたことだろう。ドラマやアニメで「え！ここで終わりなの！続きは？」という誰もがした経験。ミステリーを読みながら「もしや、ここは結末の伏線になっているのでは」と考察し読み進めた経験。

「待ち遠しさ」が大切なのである。

これが物語を読み進めていく推進力となり、多少難解な語彙も超えていける。『こころ』は物語の起伏が絶妙に上手い。がらりと動いたと思うと、「私」がぐずぐずして止まる。と思うと、止めていた壁はあっけないほど簡単に崩れ、物語は流れてゆく。作者に翻弄されながら読んでいくことになる。

「精神的に向上心のないものはばかだ」

「覚悟、―覚悟ならないこともない」

惹きつける言葉が並ぶ。読み終えた生徒は何度も元に戻り、行ったり来たりして作者がちりばめた結末への布石を拾い集める。

結末には「Kはなぜ自殺をしなければならなかったのか」という最大の疑問が残る。初めは、恋に敗れたため多くの生徒が読む。だが読み返すうちに違和感に気づく。いや、もしかすると…。

「私」と「K」の言動をもう一度見ていく。出した答えは生徒自身の生き方や経験を反映している。恋に悩む者は恋の視点で深掘りし、友達関係で悩む者は「私」と「K」との関係を見つめる。「家制度」から読み直し、解釈する者も出てきた。

そう、見る者によって千差万別の『こころ』が立ち現れるのだ。自身の経験を十分に注ぎこめる「器」を『こころ』は有している。自身を映す「鏡」と言い換えてもいい。生徒を魅了する所以はここにあるのだろう。

今年度から『こころ』を扱わない高校も多い。学習指導要領の改訂で「文学国語」と「論理国語」が選択制になったためである。私の学校でも三年生から文学的文章を読まない。文学の優位性を語るつもりはないが『こころ』に触れずに卒業を迎えてしまうことが、ただただ淋しい。

ネット世界では玉石混淆、有象無象の情報が流れ続けている。巷で流行の生成AIは「正しそう」な回答を吐き続けている。SNSで出会った誰かの言葉を、さも自分の考えのように錯覚してしまうこともしばしばである。今年の芥川賞を受賞した九段理江『東京都同情塔』には次のような記述がある。

「いくら学習能力が高かろうと、AIには己の弱さに向き合う強さがない。無傷で言葉を盗むことに慣れきって、その無知を疑いもせず恥もしない。人間が『差別』という語を使いこなすようになるまでに、どこの誰がどのような種類の苦痛を味わってきたかについて関心を払わない。好奇心を持つことができない。『知りたい』と欲望しない」

AIに限らず私たちにも当てはまらないだろうか。ことばが氾濫して、その価値・重みを感じづらくなっている現代。目先の「役に立つ」が優先され、目に見えないものが切れ捨てられる現代。

だからこそ実感の伴った言葉、あるいは自分の身体や経験と結びついた言葉を使いたいと思う。その時、すぐには「役に立たない」文学こそ力を発揮する。人間の深いところに触れ、漢方のようにじわじわ効いてくる。硬直しつつある人間のこころを揺さぶり解かしてゆく。良くも悪くも「私」や「社会」、「世界」の見方を壊してくる。

そんな『こころ』をはじめとする文学が、生徒の懐にそっと入ってくれればいいなと願う。（会員・県立広島高校教諭）

＊4月異動前の西条農業高校時代に書かれた原稿です。

2024年（令和6年）6月1日発行
「漱石と広島」の会